2017年3月26日

福音書からのメッセージ

弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」

（ヨハネによる福音書9章2節）

この当時、病気になることや不幸が起こること、また貧しいことなどは、神さまからの罰だと考えられていました。逆に裕福で、子どももたくさん生まれ、健康な人は神さまに祝福されているとされていました。わたしたちの身近なところでも、同じようなことがあるかもしれません。その行いが悪いから災いが起きてしまうという、因果応報という考え方です。

今日の福音書では、生まれつき目の見えない人を見た弟子たちがイエス様にこのように尋ねます。「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」。弟子たちは、この目の見えない人を罪人として捉えていました。彼は誰かが罪を犯したから、生まれつき目が見えないのだと言うのです。それがイエス様の弟子たちの考えでした。

しかしイエス様のまなざしは、その人をただ罪人として捉えてはいませんでした。イエス様は彼を見てこう言います。「神の業がこの人に現れる」と。つまり誰もが視線の先からそらし、罪人だと決めつけ、関わることをしなかった人を見て、神さまはこの人に手を差し伸べてくださるのだと宣言されたのです。

彼はイエス様に見いだされ、見える者とされていきます。なぜ彼はそうされたのでしょうか。信仰深かったのか。あるいはイエス様に必死に頼んだのでしょうか。いいえ、彼は何もしていません。ただ暗闇の中にいた彼に、イエス様は近づき、手を差し伸べました。

わたしたちはこのドラマを、自分の物語として感じていきたいと思います。自分は見えているのだ、わたしにはすべてがわかっている。わたしたちがそう思った瞬間に、本当に大切なことが見えなくなってしまう、それがわたしたちなのです。

目の見えなかった人は見えるようになりました。それは、世の光であるイエス様の姿を見ることができたからです。イエス様の光、それはもしかすると、自分が光の中にいると思ったら輝かないようなものかもしれません。暗闇にわたしたちがおり、神さまの助けをただひたすら待っている時に、イエス様は近づいて来られます。そしてその光にわたしたちは気づかされるのです。

イエス様は人の目に触れられない存在に目を注がれました。同じようにわたしたちもまた、イエス様に目を注がれた一人ひとりです。そしてイエス様によって目を開かれたならば、次はイエス様の視線の先にあるものに、イエス様と一緒に目を注いでいきましょう。

イエス様はわたしたちを必ず照らしてくださいます。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/